

『女殺油地獄』考

―「節句」と「粽」・「幟」・「菖蒲」の作劇法―

バス・アンビカ

はじめに

『女殺油地獄』下之巻「豊島屋の場」において、「粽」・「幟」・「菖蒲」という「もの」が重要な役割を果たしている。『女殺油地獄』は、近松門左衛門晩年の作で、享保六年（一七二一年）竹本座初演。大阪の油屋・河内屋の放蕩息子である与兵衛が借金返済に困り、近所で同じ商売をする豊島屋の女房お吉に金策を頼んで断られ、お吉を惨殺する、という世話物である。五月五日（端午の節句）を時間設定とした「豊島屋の場」において、近松は「粽」・「幟」・「菖蒲」という節句に因む「もの」を用いて、登場人物の心理の変化や事態の推移を象徴的に描く手法を示している。

近松世話浄瑠璃における「もの（道具）」に関する研究史を略述すると、信多純一に、『心中天の網島』における『カミ』―紙・神・髪―という同音異義表現に注目する研究^{（注1）}がある。

る。信多は、「紙」という小道具が、作品の上之巻では「起請」として、中の巻では「守袋の女の文」という趣向として登場人物の運命に絡み合い、舞台装置として劇的な緊張感を集めるものとして使用されていると論じている。また、時松孝文は『冥途の飛脚』下之巻新口村で師走のはてに降る「時雨」と「笠」に注目し、近松は、謡曲『善知鳥』『時雨』・「笠」の趣向を『冥途飛脚』に取り込むさい、和歌が伝統的に扱う本情本意とは異なる使い方で、登場人物の感情を託すものとして仕込んだと論じている。^{（注2）}

心情を「もの」に託して述べる技巧は、浄瑠璃に限らず、和歌における「寄物陳思歌」をはじめ日本の古典文学においては一般的な技法といえるが、本稿では、「豊島屋の場」における「粽」・「幟」・「菖蒲」という「もの」に関する近松の作劇法の分析を試みたい。

一、「豊島屋の場」概略

豊島屋の場面は、五月五日、端午の節句を迎える油屋・豊島屋を舞台として語られる。町並みには、家毎に庇の屋根に「蓬」・「菖蒲」が飾られ、男子がいる家には「幟」が掛けられている。

同場面の粗筋は以下のとおり。女ばかりの豊島屋では、女房のお吉は三人の娘の世話で忙しくしている。売掛金の取り立てに外出していた亭主の七左衛門はいったん家に戻って再び出ける。亭主が留守の間に、勘当され身の置き所もなくない借金返済に困った河内屋と兵衛が、日頃から親しくしているお吉に金策を頼みにやって来る。そこへ、与兵衛の義父・徳兵衛が訪ねてきたので、与兵衛は影に隠れる。徳兵衛は元は河内屋の使用人で、与兵衛の実父が亡くなった後、河内屋を守るために沢の後夫となったものであった。徳兵衛は勘当した義理の息子・与兵衛のことを思い、お吉から、それとは知らせず、与兵衛に金を渡してくれるように頼みに来たのであった。そこへ現れた与兵衛の実母・沢は、勘当した息子に金を恵もうとする徳兵衛を叱責し、いっしょに家に帰ろうと徳兵衛を引き立てる。と、その拍子に、沢の懷から「粽」が落ちる。実は沢も与兵衛のことを思い、毎年節句に食べさせていた「粽」と金を与兵衛に渡すつもりで、豊島屋を訪ねていたのであった。徳兵衛と沢は互いに、与兵衛のことを思い

ながら、勘当した手前をおもんばかり、内心を明かせなかったのである。二人が帰った後、外で話を立ち聞きしていた与兵衛は豊島屋の中に入り、金の無心を頼んでお吉に拒否され、油まみれになりながら脇差でお吉を殺す。与兵衛は、お吉の死に顔や蚊屋の中で寝ている三人の子供の顔つきを目にして、恐怖に震えながら戸棚から金を盗んで逃げ去る。

述べたように、豊島屋の場面は、端午の節句という時間、それに因む事物、「粽」・「幟」・「菖蒲」が場面展開に用いられている。以下にまず、「粽」に関する近松の作劇法について検討する。

二、「豊島屋の場」における「粽」

「豊島屋の場」における「粽」は、放蕩息子である与兵衛に対する実母・沢の愛情を示すために用いられた「もの」であるといえるだろう。本作の当該場面は次のとおり。(注)

母の拾の懷より、板間へぐわらりと落ちた何ぞ、粽一把に錢五百、なう情けなや、恥づかしと、我が身を覆ひ、押し隠し、声を上げ、徳兵衛殿、まっぴら許してください

前記梗概に記したとおり、「豊島屋の場」では、豊島屋に訪れた沢の懷から「粽」が落ちることによって、隠されていた沢の内面が明らかにになる。

ここでは、当時の「粽」がどのようなものであったのか、

『日本歳時記』（貞享五・一六八八年）、並びに、『滑稽雑談』（正徳三・一七二三年）の記事をとりあげ、確認しておきたい。

四日、沐浴、粽を製すべし。餌粽を製するには、もちよねを用ひず。粳米をきはめて白くし、細末して沸湯にてこね作り、又沸湯にてにる。又うるし米と、もち米等分にして水にて和し、沸湯にて煮もよし。凡ちまき餌などは、米を磨にて引たるはわろし。臼にてつき、末してよし。又粽を煮に、稻柴の灰汁にて煮べしと、月令廣義に見えたり。唐の代に端午の粽其品多し、角粽、菱粽、角黍、百索粽、九子粽あり。粽を角のごとくにし、又錐のごとくにし、又菱角のごとくし、又竹の筒のごとくし、また秤の錐のごとくにし、或五色の糸を繩になふて、数珠の如くつなぐもあり。我国にも古しへは、粽を五色の糸にてかざりけるとなん。されば伊勢物語にも、人のもとよりかざり粽をおこせりとかけり。又拾遺集十八の詞書にも、ちいさきかざりちまきとあり。或だんのごとくして、九つらぬるもあり、いづれもまこもの葉にてつむなり。

『日本歳時記』

粽の製、一ならず。角黍は、黍にて製し、其形角ごとし、錐粽は錐のごとし、今和俗の製する、おほくは菱錐粽也。

粽は菱米のごとし、筒粽は竹の筒の形也、秤錐粽は秤の錐のごとし、丸字粽は団子を九つつらぬく、百索粽は珠数のごとし、おほく長くつらぬけり。

『滑稽雑談』

以上の資料から、端午の節句に「粽」を食べる習慣は中国から伝えられたもので、「粳米」や「うるし米」「もち米」などを粉にして水や湯で練ってから煮たものを食したことが知られる。また、近松が活躍していた当時の「粽」は「錐粽」が多く、「菱粽」「筒粽」「秤錐粽」「丸字粽」「百索粽」など多様な種類があったことがわかる。元禄期の観客にとって「節句」という年中行事に欠かせない「粽」を、近松は母親の愛情を示す「もの」として、巧みに利用していたのである。

三、「豊島屋の場」における「幟」

次に、「幟」に関する作劇法を検討したい。「幟」は場面の開幕と閉幕に次のように書かれている。

葺きなれし。年もひさしの蓬、菖蒲は家ごとに、幟の音ざわめくは、男子持ちの印かや。（開幕）

右手より左手の太腹へ、刺いては挟り、抜いては切る。

お吉を迎ひの冥途の夜風、はためく門の幟音、あふちに売場の火も消えて、庭も心暗闇に、うち撒く油、流るゝ血、踏みめらかし踏み滑り、身うちは血潮の赤面赤鬼……（閉幕）

筆者は、開幕の「幟の音ざわめく」が、閉幕では「はためく門の幟音」に変化していることに注目する必要があると考えている。近松作『出世景清』『用明天皇職人鑑』『国性爺合戦』など時代物には戦場における旗指物としての「幟」は描かれるのであるが、本作の「幟」には特別の意味があったように思われる。

まず、五月五日に使われた当時の「幟」がどのようなものであったのか、『日本歳時記』と『滑稽雑談』の当該記事によつて確かめておきたい。

紙旗にいろ／＼の絵をかきて長竿につけ、是をも戸外にたて侍る。これをのぼりと云。或絹を用るもあり。或は長旒を加えて、これを吹流しと云。朔日より五日まで、兒童の弄事とす。

『日本歳時記』

紙旗にいろ／＼の絵を書て長竿につけ戸外に立、是を幟と云、是又絹布を用て奇羅をなせり。又一説、これらの事は、必竟は、艾虎・文人などよりおこれりと云。年斎拾唾云、端午に旗に絵かきて門に立て、邪鬼をさるは、帝蚩尤が形をはたに書て、邪鬼をふせがれたり、蚩尤旗といふと古今註にせるせり。

『滑稽雑談』

現代では、端午の節句に、家の庭や軒に「鯉のぼり」を立てるが、元禄当時は「邪鬼をさる」ために、「長竿」に、旗

のような「幟」を付けたものを立てていたのである。右の記事から、紙や絹で作られた「幟」には、絵や家紋が描かれていたことがわかる。

ついで、「ざわめく」「はためく」という言葉の意味を確かめておきたい。『日本国語大辞典 第二版』の解説によれば、「ざわめく」は「声や音がさわがしい感じになる。また、多くのものがどことなくさわぎ動く感じになる」という意味である。同辞典には『国性爺後日合戦』の「村鳥むれるごとくざはざはざは、ざはめき渡つて見えたるは、契約の討手の軍兵ござんなれ」という例文が取りあげてある。用例が他にみあたらないため、本稿では「ざわめく」は、『日本国語大辞典』の、さわがしい感じになる、ものがどことなくさわぎ動く感じになることを表現する言葉であると考えておく。

「はためく」の用例には次のようなものがある。

敦賀の津は、海の表うしほ湧きあがり、暗闇のごとくなり、どう／＼と鳴りはためく。

『かなめいし』（寛文三年、一六六三年頃刊）

雷大に鳴りはためく

『太平記』卷三十三「新田義興自害事」

『かなめいし』は浅井了意作、寛文二年に京都で勃発した地震にまつわる記事を集めた仮名草子である。右の引用文は、同作中巻「越前敦賀の津并江州所々崩れし事」の記事。地震によって敦賀の港の海面がわき上がり、暗闇のようになって、

あたりがどうどうと鳴り響いたさまが描写されている。『太平記』は、江戸遠江守が川を渡ろうとするところへ、稲光がひらめいて、雷鳴が大きく鳴りとどろくという場面である。

「はためく」という言葉は、いずれも「鳴」という言葉と共に用いられているから、本作の「はためく」という表現も、「幡」の振幅という動きだけではなく、大きな音を伴い鳴りためいている様を表現していると考えて良いだろう。

「豊島屋の場」開幕の出だし「葺きなれし、年もひさしの蓬、菖蒲は家ごとに、幟の音ざわめくは、男子持ちの印かや」という表現について考えてみたい。この記述に連続して、豊島屋家中におけるお吉や娘たちの姿が描かれているから、豊島屋の外にざわざわと鳴り響く「幟」の音は豊島屋と関連するものとして捉える必要があるだろう。後に明らかとなる、豊島屋の幼い子供とお吉の身に近づく不幸を暗示していると考えて良いだろう。また、この「ざわめく」は、豊島屋を訪れる与兵衛の義父・徳兵衛と、実母・沢の親心に起こる不安を示しているとも解せよう。「どこことなくさわぎ動く感じになること」は、金の返済に切羽詰まった与兵衛がお吉を殺す予告となっているとも解釈できる。このように、近松は「幟」の音を用いて場面に宿る不安、心配の雰囲気を作り上げていると考えられる。

一方の閉幕は、与兵衛がお吉を殺す場面である。借金を申し出て断られた与兵衛は、お吉に殺意を抱き、油まみれにな

りながら、脇差で、お吉を衝撃的にさし続ける。この劇的な場面と連動するように、外の「幟」もばたばたと激しく動き、鳴り響く。この音は、豊島屋に迫る危機が大きなものとなっていること、与兵衛がのっぴきならないところまで追い詰められていること、子供を心配しながら殺されるお吉の心の動きの大きさを表現していると思われる。開幕の「ざわめく幟」の音が、閉幕では「はためく」音に変わる、外でざわざわと吹いていた風が荒々しくなる、という事象の変化は、与兵衛やお吉の心理の変化を示すように仕組まれていると考えて良いだろう。

四、「豊島屋の場」における「菖蒲」

「菖蒲」は、夏に咲く花で、五月の節句に、邪気をはらうために家の軒に飾られた。男の子は、菖蒲刀や薙刀・槍を持って、お互いに打ち合ったりして遊んだ。

『花譜』(元禄十一・一六九八年)には、次のような記事がある。

菖蒲花(はなあやめ)……古歌に、あやめとよめるは、沢におふる菖蒲とて、端午に家をふく物をいふ。此あやめにはあらず。

近松は「豊島屋の場」開幕と閉幕に「菖蒲」を描いている。繰り返しになるが、当該箇所を引用しておく。

葺きなれし、年もひさしの蓬、菖蒲は家ごとに、幟の

音ざわめくは、男子持ちの印かや（開幕）

軒の菖蒲のさしもげに、千々の病は避くれども、過去の業病逃れえぬ、菖蒲刀に置く露のたまも乱れていき途絶えたり。（閉幕）

開幕、閉幕ともに「菖蒲」という言葉が置かれ、閉幕には「菖蒲刀」が描出される。開幕の「菖蒲」は、豊島屋の三人の幼い子供の将来の安全を祈り、邪気を晴らう心情を込めて飾ったものであると考えられる。しかしながら、閉幕では、「軒の菖蒲」によって「千々の病」を避けることは出来たが、「過去の業」因から逃れることが出来ずに、「菖蒲」は「菖蒲刀」に変じてお吉を刺し貫き、菖蒲の葉に置く露の玉が消えるように、お吉の魂も乱れて、息が絶えてしまったと述べている。閉幕は、開幕の語り出しに呼応するように、五月の節句を背景にして、与兵衛が手にしていた脇差が「菖蒲刀」として描かれているのである。

五、『生玉心中』と『女殺油地獄』

ここまで、節句に因む「粽」・「幟」「菖蒲」について検討してきたが、近松は正徳五年（一七一五）五月、大坂・竹本座初演『生玉心中』でも、端午の節句を時間設定としている。本節では、同作と『女殺油地獄』とを比較することによって、『女殺油地獄』の表現方法の特色について考えてみたい。

『生玉心中』は、大坂伏見坂町の遊女おさがと馴染んで借

金に追われていた茶碗屋の嘉平次が、悪友長作に金を奪われ名誉を傷つけられて、生玉神社の境内でおさがと心中を遂げる次第を描いたものである。実説は不明であるが、お初・徳兵衛の十三年忌を当て込んだ作品で、全体に『曾根崎心中』を踏まえた構想がとられている。新しく嘉平次の父や姉、許嫁などの情愛が強調されており、主人公たちの悲劇が一層複雑で深刻なものとなっている。

次に、『生玉心中』と『女殺油地獄』における「菖蒲」を比較してみる。

『生玉心中』において「菖蒲」は次のように表現される。^(注10)

上之巻 社めぐりの道行

客に泣かせて後朝の、別れあやなき菖蒲草、局女郎になぞらへて牡丹畑の名尽しに

中之巻 大和橋出見世の場

今日の菖蒲の節句にも、見世さし身皿。とやかくと、人もひ入れや、灰吹きも、碎けて物を思ふらん、繁昌の地の紋日さへ、更けて寂しき五月闇

五日にも十日にも、親の顔をいつ見せた……塩町の姉が礼に来て、親子兄弟、菖蒲の杯するとて、今日の節句は嘉平次の顔が見えぬと、

下之巻 嘉平次おさが道行

今日の祝いの菖蒲の露も、我が袖には憂はしや、つらや、端午の紙幟、かみにも世にも捨てられて、菖蒲刀の切つ

先に、かゝる契りの悪縁と、帰らぬ道をたどりに行く、
涙の雨に星消えて、

惜しや五日の花菖蒲、花の体を血に染めて、恋の刃にふ
し見ざかの世語り、とこそなりにけり。

右の、上之巻「社めぐりの道行」における「菖蒲」は、遊
女を花になぞらえた花づくしの一部として描かれており、中
之巻「大和橋出見世の場」では、端午の節句の別名としての
「菖蒲の節句」が出され、端午の節句のお祝いに酒を飲むこ
ととして「菖蒲の杯する」という表現が用いられている。下
之巻「嘉平次おさが道行」においては、後に、おさがが嘉平
次の「脇差」に貰かれることが「菖蒲刀の切つ先に、かゝる」
と表現され、「花菖蒲」に喩えられたおさがが五月五日に亡
くなることが「惜しや五日の花菖蒲、花の体を血に染めて、
恋の刃にふし」と記されている。五月五日に殺人や心中とい
う事件が起こること、脇差が菖蒲刀に擬せられていること、
菖蒲だけではなく幟も描出されること等々、『生玉心中』
並びに『女殺油地獄』の舞台背景や表現は近似しているとい
える。

しかしながら、両者は全く同じ仕組みによって作られてい
るわけではない。『生玉心中』においては、上之巻冒頭部と
下之巻巻末部が呼応するように構成されている点など、近松
の工夫は見られるのだが、近松は『生玉心中』で用いた手法
をより進化させて『女殺油地獄』を描いたと考えうる。進化

は、前述したように、「幟」を単に「幟」として出すのでは
なく、「幟」が「ざわめく」いたり「はため」いたりするよ
うに、動きを伴う表現に改めるところに認められるであ
ろう。「ざわめく」という言葉によって、近松は、人々の内
面にある不安や事件の予兆を表現し、「ざめめく」を「はた
めく」に変化させることによって人の心の変化、事件の推移
を示し、「幟」が「はため」いている際には人々の心の動き
の振幅が最大限に達していること、事件がクライマックスを
迎えていることを表現しているのだと考えられる。

おわりに

本稿をまとめれば、以下のことがいえよう。

○本作は、当時の観客に、年中行事として慣れ親しまれた
事物を効果的に用いている。

○また本作は、舞台上の演劇として効果的な「動的」な表
現を、詞章の上でやはり効果的に用いている。

○近松は、自身の先行作品に使用した趣向を、晩年に至っ
て、なお進化させている。

初期の作品においても、例えば『曾根崎心中』の「編笠」、
『卯月紅葉』の「水晶」など、検証すべき例は多いが、近松
門左衛門は「もの」使いの上手い作者として改めて捉え直さ
なければならぬだろう。

- 注(1) 信多純一「近松作品解釈の問題点『心中天網島』付載紙・髪・神『心中天網島』」「近松の世界」(平凡社 一九九一年)による。
- 注(2) 時松孝文「冥途の飛脚」演出試考、「時雨」と「笠」の作意」(『歌舞伎研究と批評』14号、一九九四年)による。
- 注(3) ただし、近松作品において扱われる食べ物全般については、『心中天網島』『天満紙屋の場』における「蜜柑」や、『山崎与次兵衛寿の門松』『九軒町井筒屋の場』における正月の「掛鯛・柑子、橘・橙」等の例があるが、これらには特別の趣向は認められない。
- 注(4) 『女殺油地獄』の引用は、『近松門左衛門集①』(新編日本古典文学全集74、小学館、一九九七年)による。
- 注(5) 『日本歳時記』(貝原好古編録)の引用は、早稲田大学図書館本による。『滑稽雑談』の引用は、国書刊行会本(四時堂其諺編、大正十一年刊)による。
- 注(6) 引用は注(5)と同じ。
- 注(7) 『かなめいし』の引用は、『仮名草子集』(新編日本古典文学全集64、小学館、一九九九年)による。
- 注(8) 『太平記』の引用は、『太平記④』(新編日本古典文学全集57、小学館、一九九八年)による。
- 注(9) 『花譜』(貝原益軒著)の引用は、早稲田大学所蔵本(天保十五年刊、元禄十一年刊本の補刻)による。
- 注(10) 『生玉心中』の引用は、『近松門左衛門集②』(新編日本古典文学全集75、小学館、一九九七年)による。

その他の参考文献

- ・白方勝、『近松浄瑠璃の研究』、「近松作文法の考察」、風間書房、一九九三年。
- ・原道生、『鑑賞日本古典16 近松集』、尚学図書、一九八二年。